

中国のほんの話(65)

中藺英助『北京飯店旧館にて』

～ 中国をつねに焦点にすえながら、生き続け・描き続けた作家 ～

蔭山 達弥

「敗戦によって、日中戦争から太平洋戦争にかけての八年間を一居留民として暮らした中国を追われ、翌46年に引揚帰国してから、1987年に北京を再訪するまで、41年間という歳月が必要であった。その間には、日中友好運動の消長があり、国交回復があり、両国間に人の往来がはげしくなればなるほど、わたし自身はなぜか静心もて中国には帰りにくいというのか、平静的な気持ちで再訪する自信をなくしてしまうのであった。……87年に至って、文革後の開放時代を迎えた中国へ、当然のことながら旅費には一切自分で稼いだ分を充当するという、己れに課した通りの条件で再訪の機会を得たとき、わたしはそうしたちゅうちょをようやくふっ切ることができたのである。その旅の後半、一木一草にも懐旧の情の湧くままに北京を歩きまわって成った作品が本書である。」(中藺英助『北京飯店旧館にて』「後記」筑摩書房1992)

中藺英助(なかの えいすけ、1920.8.27～2002.4.9)は1937年、17歳で中国に渡って大学入学を志す。1940年、北京に入り現地邦字紙・東亜新報社に入社、中国側文化学術界担当記者になる。北京大学銭稻孫の知遇を得て文學院聴講生に。翌41年、在北京文芸同人誌「燕京文学」同人になり、文学活動を始める。1945年10月、大陸二世の日本人女性・尾崎とせ子と結婚。敗戦により、1946年、東京へ引き揚げた。戦後の中藺は1950年、30歳にして再び創作を開始、七年後に初の小説集を刊行。1961年に日本最初の国際スパイ小説と称される『密書』を刊行、20年にわたりスパイ小説家をして活躍した。

『北京飯店旧館にて』は、国境を越えた視点から現代日中間の歴史の記憶を描いた中藺文学の最高峰である。本書は1987年の北京再訪をもとに、翌年以後書き続けた作品群を全面的に書き改めて、全10作の連作小説集としたものである。

「うち開けた話……、ここへくる気になったのは、老舎の『茶館』という芝居を、北京人民芸術劇院という劇団が、池袋の劇場へもってきて見せてくれたときでしたよ」

「あれは幕が開くと、まだ誰もいない暗い茶館の内側から、人通りのない街路と北京の秋空が明るくなって見えてくるんですよ。そうして、空にはヒョウヒョウと鳩笛が鳴り渡っているんだなあ。あの鳩笛に気づいた観客はどれだけいたんだろうか、と思いましたけどね」(第一話「鳩



笛のない空)」

中藺英助が41年ぶりの北京再訪を決意したきっかけは、『茶館』の東京公演を見たからだだった。『茶館』は老舎の代表作で、鳩の足につけた笛の音は北京を描く映画でも効果音としてしばしば用いられる。

北京到着の夜、街に出たわたしたちは東安市場の北口から市場に入ることにした。「記憶通り、吉祥戲院とジンギスカン料理の東来順との間に入口はあった。何百回、そこを出入りしたのであろうか。酒を呑んで、コーヒーを飲んで、喜び勇んで、怒り狂って、悲しみもだえて。いちばん多かったのは、うわべは戦時下とはどうもよい、穏やかな日々であった。一時、東安から東風と名前を替えられていたという市場は、しかし、あのきりもなく陰々滅々として、底知れぬ逃避的な愉悦を秘めた、穴倉のような市場ではなくなっていた。」むかし、吉士林という西洋風のマロン・ケーキを食べさせるしゃれたコーヒー店が二階にあったけれど、二階そのものが取り払われたらしかった。「吉士林は、学生や若い芸術家の溜り場だったのだ。日本人の酔っぱらいのだみ声を聴かずにすんだ憩いの場だから、中国人のアベックもよくやってきた。最後に陸柏年と会ったのも、そこだった。'きみは、人類という立場に立てますか?'と陸柏年はそのとき、謎のような質問を発した。」(同上)

日本占領下の北京で出会った中国の友は、謎の問いを残し、戦地に消えた。

晩年、中藺は横浜の自宅近くへ散歩に出かけてきて、ふと思った。「もうどこへも行かなくなったな、もしかするとここが終の栖になるのかななどと思わぬでもない。わが青春の故郷ともいべき中国の北京へ、もう一度だけは、さよならをいいに帰らねばならない。」

かげやま たつや(教授・中国文学)